

僅かばかりの日々

恋瀬桜

目の前に男の子が倒れている。拾って帰ろうか、と戸惑う。

家までの帰り道の途中の、居酒屋の多く構えるこの道。酔っぱらった中年が千鳥足で歩いていたり軒先につまみ出されていたりといったことは多いが、若そうな、まだ学生くらいの子は珍しいな、と俺は思った。見たところ中学生くらいの体軀だろうか。普段、見知らぬ男性が倒れていてもキリがないから、と素通りしてしまうが、この時ばかりはその少年に声を掛けていた。

「大丈夫？」

そう話しかけ、少し身体を揺するも反応はない。

そっと額に触れると熱かった。熱があるようである。

これは放っておけないと思ひ、俺はその少年を肩に担いだ。慣れない重さにふらつきながら、街灯の少ない薄暗がりの道を家まで急ぐ。

いつもの道を倍ほどの時間をかけて自宅まで戻った。

一人暮らしの成人男性によくあるアパートの一室。片手でストラックスのポケットを探つて鍵を取り、差し込む。

部屋に入って一番に、少年を自室のベッドに横たわらせた。彼は長袖のTシャツ一枚にジーンズで、かなり瘦

せているように見える。だいぶ暖かくなってきた頃合いとはいえ、夜は冷えるものだ。こんな薄着でずつと外にいたのなら、風邪でもひいたに違いないだろう。熱もあるようだし、と毛布をかけてやる。少年が目覚ます様子はない。

少年の様子に気を配りながら、俺は部屋着に着替えて食事の支度を始めた。一人暮らしの男が自炊を進んでするというのも珍しいことだろう、とは自分でも思う。幼いころからよく母親を手伝ったのが功を奏したのかもしれない。

少年のことを絶えず気にしながら料理をしていると、仕上げの味付けを終えたところで彼がわずかに身を動かしたのに気づいた。目を覚ましたのかもしれない。すぐに台所を離れて、少年のもとに駆けよる。

彼は目を覚ましていた。横になったまま、ぼうっとしたように空中の一か所を見つめている。顔を覗き込むと、彼は俺の顔をじつと見つめ、直後はつとしたように目を逸らした。

「大丈夫？」と静かに少年に声をかけた。彼はゆっくりとこちらを見上げて頷いた。か細い声で「すみません」と少年の口が動いた。気にしないで、と彼に微笑む。それでも彼は、ごめんなさい、すぐ出てくので、とうわごとのように呟く。ここに長居をしたくない様子だ。

「すぐ帰りたいようだったら、親御さんに連絡して、ち

やんと事情説明して迎えにきてもらってもいいけれどな……お父さんかお母さんの連絡先、教えてもらえる？」
そう尋ねてみると、彼は首を振った。「教えたくないの？」と再び聞くと、またも首を振る。

「お父さんお母さんの電話番号、知らないの？」
「……帰りたくない」

そうか、わかった、と彼に微笑みかけながら、どういうことだろうかと考える。ここにはいたくないが、家には帰りたくない、親にも会いたくない、とは。事情を聴いてみてもよいが、今のやり取りの反応から思うに、あまり多くは語ってくれないだろう。見たところ中学生くらいの年齢だし、ちよつとした反抗期だろうか、好きにさせていればじきに寂しくなるだろう、そう考えるようにした。

「君が帰りたいと思うまでここにいなよ、遠慮しないで」と彼に伝えた。少年は小さく頷いたので「とりあえず、一緒に夕ご飯食べようか」と微笑むと、彼はゆつくりと身を起こした。

少年はカナトと名乗った。カナトは初めの方こそ言葉少なであったが、少しずつ話をしてくれるようになった。年は十四歳だが中学校には通っていないこと。不良生

徒だなあ、と茶化したら寂しそうな顔をした。その暗そうな表情は、学校では不良と言うよりいじめられっ子と思わせるものだった。

風呂が嫌いだということ。風呂をすすめると猫の如く嫌がる。何とかして二日に一回は風呂場に押し込むようにしているが、俺が仕事に出ている間も外には出ていないようだからそれほど汚れていないはずだからよいだろうか。

俺の作る食事をうまいと思っていること。夕飯の時には申し訳ないとか何とか言いながらもすっかりおかわりする。育ち盛りだからだろうか。食後には、伏し目がちなもの毎回「おいしかった」と言ってくれるので、作る身としても精が出る。

たくさんを知っていく一方で、まだまだ知らないことも多かった。俺が仕事で家を空けている間何をしているのか、何故家に帰りたくないのか。何となく聞きづらかった。それらの疑問に見て見ぬ振りしながら、一ヶ月以上が経った。

「夕ご飯の準備、手伝うよ」
いつも疲れて帰ってきているのに、申し訳ないから、

と小さく付け加えたカナトに、ありがとう、せっかくだからお願いしようかな、と微笑む。カナトが自分から何かすると言いだしたのは初めてだった。俺も、昔は母親の料理の手伝いを何度もして、それで料理が得意になったなあ、なんてことを思い出した。

簡単にカレーを作ることにし、カナトには野菜を切つてもらうことにした。包丁の持ち方だとか、左手は猫の手にするんだよ、だとかを教えると、彼はすぐできるようになった。

要領のいい子だ、と目を離した一瞬、

「あっ」

カナトが小さく声を漏らしたのが聞こえた。カナトの手元を覗き込むと、包丁で指を切ってしまったようであった。ちゃんと洗っておけば大丈夫だから、と安心させよう優しく言う。だが彼はみるみる顔を青くした。

「……ちよつと洗ってくる」

震えた声で言うや否や台所を離れた。

大きく足音を立てて洗面所へとかけていくカナトを見て、不思議に思う。ちよつとした切り傷で真っ青になるとは。多少痛いし雑菌の入る場合だってあるが、それでもあそこまで焦るほどだろうか。

不安に思いながら台所で待っていると、少ししてカナトが戻ってきた。まだ具合の悪そうな顔をしているが、

それ以上に――

「……カナト、何、その腕」

俺が小さく呟いたのを聞くと、カナトははつとしたように腕を見て、少しもたつきながら捲っていた長袖を下ろした。

彼の腕には切り傷やみみず腫れの痕があった。

それも数か所ではなく数えきれないほどである。こうして一ヶ月も生活して何故気がつかなかったのか。そういえば、と思ひ出すのは、カナトは風呂に入るのも苦手だったし、着替えも手伝ったことがないということだ。自分の身体を俺に見せるのを避けていたように感じる。

「どうしたの、それ」

近づいて手首を握ると、すぐに振り離された。その拍子に、手のひらに握られていたものが床に落ちて、チャリン、と音がした。

数枚の硬貨。

瞬間、頭がこの状況を理解しようとする。

（何故金を握っている？小遣いとして渡した覚えはないし、もともと持っていたのか？それだったらもつと早く気がつくはずだ、ポケットに入っていたとしても洗濯なんかは自分が行うから。でないとしたら……盗った？俺から？それとも人から？俺が職場にいる間カナトが何をしているかなんて知らないし――）

「サクライさん」

カナトが俺の名を呼んだ。案外落ち着いた声。こちらをまっすぐに見つめる視線。いつも伏し目がちなカナトの目が、俺を捉える。

「サクライさん。ちゃんと、話させて」

思わず首を縦に振った。夕食の準備は一旦中断だ。

「……何から話せばいい？」

俺と対面して座布団に座ったカナトはそう切り出した。何が気になってるの、という彼の問いに、「何って……何もかも」と呟く。その傷は何なのか、どうしてできたのか、お金は何処から出てきたのか……思いつくことを立て続けに呟いていると、カナトは、じゃあ最初から説明するね、と口を開いた。

「サクライさん、僕ね、変な体質なの」

「変な、体質」

「そう。怪我したところからお金が出てくるんだ」

そういったカナトは、シャツの胸ポケットからカッターナイフを取り出して自身の腕を切りつけた。カナトの言ったことをまるで理解できていない俺が止める間もなく、のことであった。じわりと赤い線が滲む。カナトはそのまま腕を下ろして、膝を抱える格好になった。

「しばらくすればわかるよ」

カナトが言い終わるより早く、ちゃりん、という音が

した。フローリングに硬貨がぶつかる音だった。それをすくい上げたらしいカナトの手のひらには、数枚の小銭が乗っていた。俺は自分の見たものが信じられず啞然としていた。

「もちろん服に仕込んであるとか、そういうわけじゃないよ。信じてもらえないんだったら、今度は服脱いでやるけど……」

そこまで言われたら信じるしかなかった。それに俺は見たのだ。カナトの付けた傷口から、血が滴ると丁度同じように、硬貨が滴っていくのを。彼の言う「変な体質」というのを目の当たりにして、彼の腕に残る無数の傷跡にも合点がいった。

「だから、あんなに傷だらけだったのか」

「あれやったの、全部父さんと母さんだけだね」

何でもないように言ったカナトの一言に、凍り付く。

「……僕が物心つくより前に、父さんと母さんはこの体質に気づいてた。でも、最初は出来るだけ隠そうとして、僕にケガさせないようにしてくれただけなんだ。こんな僕でも、普通の生活が送れるようになって」

でも、小学校に入学してから数年して、全部変わっちゃった。

カナトはその顛末を静かに語った。

父親が失業したこと。それまで専業主婦であった母親がパートで働き始めたこと。それでも三人で暮らすにはお

金が足りなかったこと。カナトを、利用するようになったこと。

「……貧しくなっても、捻ればお金が出てくる水道みたいなのがあったんだよ。都合のいいことにね」
彼は自嘲気味に言う。

家では毎日のようにカッターで切りつけられていたこと。それ以外の時に両親は家を空けていたこと。小学校の友達にも言えなかったこと。

「それで、家を出てきたんだ」

全部語り終えて、彼は目を伏せた。

カナトの語った自身の人生に、思わず唇を噛んでしまう。家に帰りたくない、親に合いたくないという言葉が含むものを、そこまで考えたことがなかった。目の前の少年にかける言葉が、見つからなかった。

カナトは寂しげに座っている。

俺は、そんな傷だらけの少年の傍に寄り、そっと抱きしめた。

彼がその人生で失ってしまったものの中で、俺が与えられるものは、人の温もりだけだと思った。それだけのことだった。

彼にもう怖い思いはさせない。寂しい思いも、ひもじ

い思いもさせない。もう、カナトを傷つけない。胸の内
でそう固く誓う。

強く抱きしめた。
今度こそカナトが、幸せになれるように、と彼を一層

「……やっぱりこうなっちゃった」

この数ヶ月、一步も出なかった——後半は出して貰えなかった、というのが正しいが——小さなアパートの一室を振り返りながら呟いた。

サクライさんで、五人目だ。

両親の暴力に耐えかねて家を出たのが十二の時。それから約二年、色々な人の下を転々としてきた。みんな同じだった。初めは本当に優しくしてくれて、僕の体質を明かしても「自分は違う」と言っただけで変わらなず接してくれる。でも、最後には、みんな。

今度はもしかして、と思っただけ僕が馬鹿だった。何回間違えるんだよ。そうだよわかっている。大人なんて、お金が絡むと平気で他人を傷つけられるんだ。

「……まあ、そういう大人の善意に付け込んで寄生してる僕も僕なんだけど」

また僕は、文字通り自分の身を切って生きていく。路上に身を隠して、文字通りに身を切って得たわずかなお金で飯を食って。

とりあえず、できるだけ離れた場所に行かなくちや。多分サクライさんは追いかけてくる。だってタナカさんもヨシムラさんもそうだったもん。絶対に僕のことを探す。

サクライさんは僕のこの体質のことを素晴らしい才能だ、能力だ、と褒めてくれたことがあった。でも僕からすればこんなの病気だ。忌々しい呪いだ。早く大人にならなきゃ。一人で生きていけるようにならなきゃ。

アパートを背に、一步、また一步と踏み出す。

こうなってしまうのも、思いだされるのが温かいスープの味と腕の温もりなのは、ずるい。